

《論文》

文学作品に見るスピリチュアルペインの顕れ Ⅲ ——『日々の記録』から考察するスピリチュアルペイン——

小林 和夫

はじめに

死に近接する人が感じる痛みの一つに、スピリチュアルペイン (spiritual pain) がある。近代ホスピスの源流とされるセント・クリストファー病院を1967年に設立したソンダース (1918-2005年) が、身体的苦痛、社会的苦痛、精神的苦痛に加えて、スピリチュアルペインを含む全人的苦痛 (total pain) の緩和を提唱⁽¹⁾した頃から、スピリチュアルペインという語は、医療界、とくに緩和ケア医療の領域において浸透しはじめ、実際にスピリチュアルペインのアセスメントや、そのケア (スピリチュアルケア) が医療現場で行われている。ところが、現在に至ってもなお、スピリチュアルペインの定義は統一されてはおらず⁽²⁾、国内の緩和ケア医 (387名) と精神科医 (374名) に対する質問紙調査の結果でも、「スピリチュアルペインは抑うつとは異なる」という認識、すなわち精神的苦痛とスピリチュアルペインとが異なるという見方が大勢を占めたものの (72%)、「十分に定義されずに使用されている」との回答もまた、69%に達している⁽³⁾。

そもそも「痛み」とは何だろうか。

国際疼痛学会 (IASP) は、2020年7月、1979年以来、41年ぶりに痛みの定義を改訂した。それによると、痛みとは「実際の組織損傷もしくは組織損傷が起こりうる状態に付随する、あるいはそれに似た、感覚かつ情動の不快な体験」である。この定義には、加えて6項目に及ぶ付記が続けられた。「痛みは常に個人的な経験であり、生物学的、心理的、社会的要因

によって様々な程度で影響を受けます」、「痛みと侵害受容は異なる現象です。感覚ニューロンの活動だけから痛みの存在を推測することはできません」、「個人は人生での経験を通じて、痛みの概念を学びます」、「痛みを経験している人の訴えは重んじられるべきです」、「痛みは、通常、適応的な役割を果たしますが、その一方で、身体機能や社会的および心理的健康に悪影響を及ぼすこともあります」、「言葉による表出は、痛みを表すいくつかの行動の1つに過ぎません。コミュニケーションが不可能であることは、ヒトあるいはヒト以外の動物が痛みを経験している可能性を否定するものではありません」という6項目だ（「定義」を含めて、以上公式日本語訳）⁽⁴⁾。身体的な痛みに加え、社会的、心理的な痛みをも包括している点が、この新たな定義の特徴ではある。ではあるが、ここでもスピリチュアルペインの存在は、どこか在于るようでもあり、在らないようでもあり、茫洋としたまま積み残されている。

痛みは、特殊で個人的な体験だ。「あなた」の痛みを、「わたし」が忠実に、全く同じように感じることはない、だろう。ところで文学は、「作者がその体験を語るもの」⁽⁵⁾である。書かれたものがすべて創造の産物であれ、現実に材を取ったものであれ、文学作品というものは作者の個人的な特殊体験の記述である。一方で、文学は、こうした特殊体験を「特殊体験に即して追求しながら、普遍的なものにまで高めること」⁽⁶⁾にこそ眼目がある。スピリチュアルペインという個別固有の特殊な体験は、もしや文学というフィルターを通して、その輪郭がより判然とするのではないだろうか。

このような考えから、これまで私は、芥川龍之介（1892-1927年）の短編小説『歯車』、および種々の『怪談』といった、広義の“文学作品”を通して、スピリチュアルペインの顕れと、そのやわらぎの可能性、あるいは不可能性について検討してきた。今回は、作家による日々の記録、すなわち『日記』を通して、同じように考察を加えてみたい。

I . 文学者の日記 あるいはありのままの「私」

ドナルド・キーン（1922-2019年）⁽⁷⁾は、「私の知る限りでは、日記というものが、そうしたもの（小説、随筆など※筆者注）に劣らぬぐらい重要だと思われるのは、ほかならぬこの日本だけなのである」⁽⁸⁾とし、「まことに日記とは、あの最も典型的な日本の近代文学……私小説の始祖だったのである」⁽⁹⁾と断じてみせたが、本論は、日記のなんたるかを論じ、あるいは日記の文学的な意義や、歴史的な価値、文化社会学的な役割等を云々するものではない。文学者の記した日記におけるスピリチュアルペインの顕れを看取し、できうるならば「日記」という「行為」、すなわち「（私の）日々を記し、残す」という「行為」のうちに、スピリチュアルペインのやわらぎにつながる何かを見いだすことができるものかいかかが、試みようとするばかりである。

ところで、なにゆえ「日記」であるのか、については、詳らかにしておく必要があるだろう。

日記研究者の言を俟つまでもなく、日記には大きく分けて、公表することを前提に書かれた作品と、あくまで私事として残された個人的記録とがある。

たとえば脊椎カリエスにより 34 歳で世を去った正岡子規（1867-1902年）の『病牀六尺』は前者であり、同じ作家の『仰臥漫録』はおそらく後者と見なしてよいだろう。

『病牀六尺』は、「明治三十五年（一九〇二）五月五日から子規が亡くなる前々日の九月十七日まで新聞『日本』に百二十七回にわたって連載」⁽¹⁰⁾されたものであり、それ以前の手になる『仰臥漫録』は、「土佐半紙に書かれた私的な手記。子規に公表する考えはなかった」⁽¹¹⁾のであるからだ。Web 上での日記（Web 日記）も、それがコミュニケーションの手段であろうと、あるいは自己表現の一種であろうと、いずれ公表を前提したものに分類されよう。もちろん、不特定多数の読者を想定してはいなくとも、特定の個人に読ませるもののように、公表、非公表の曖昧な領域に位置す

る日記の類もある。もとより文学者においては、私的な手記としてであっても、やがて公になるを推し図らずに兎戯のごとくただただ書き残すことなどあり得ないだろう。いずれ、あらゆる日記に共通することは——意図的に歪曲し、あるいは加工することがなくはないかもしれないが——そこに記されたことが、日々の現実であり、時々的心証である、ということだ。芥川の『菌車』も、かなりの部分現実に依拠している。しかし、あくまでも「小説」というものがたりの枠組みに封ぜられ、熟されたものではある。

日記はそのままである。たとえこの国で日記が、小説に劣らないほど重要視されていようが、日記はむき出しの現実であり、「私」である。とくに、文学者⁽¹²⁾による日記には、文学作品のように磨かれる以前の、ありのままの「私」が、透徹な目線のうちに描かれている。その「私」の、あからさまな流露のうちに、スピリチュアルペインの顕れを見いだしたい、と、考えたのである。

Ⅱ. 子規『病牀六尺』『仰臥漫録』に見る苦しみとやわらぎ あるいは死を凌駕する生の痛みとの対峙

病牀六尺、これが我世界である。しかも此六尺の病牀が余には廣過ぎるのである。僅かに手を延ばして疊に触れる事はあるが、蒲団の外へまで足を延ばして體をくつろぐ事も出来ない。甚しい時は極端の苦痛に苦しめられて五分も一寸も體の動けない事がある。苦痛、煩悶、號泣、麻痺剤、僅かに一條の活路を死路の内に求めて少しの安樂を貪る果敢なさ〈……〉(五月五日)⁽¹³⁾

『病牀六尺』冒頭である。

俳人、歌人、詩人、小説家、評論家、随筆家として知られる明治の文学者、正岡子規(以下、子規)は、1889(明治22)年5月9日夜、咯血し、肺結核と診断される。22歳。やがて二次感染として生じる結核性脊椎炎(脊椎カリエス)を発症し、1902(明治35)年9月19日、世を去った(以降、

子規の項のみは、時代区分を明確化できるので、西暦・元号併記とする)。脊椎カリエスは、結核菌が脊髄に及び、「局所の疼痛や変形、時に四肢の麻痺が生ずる。〈……〉次第に破壊が進行し、突背や膿瘍が目立ってくる」(『医学大辞典』(2006年)南山堂)ものである。辞典の示すその症状、病者の苦しみは、子規の手によって、こうなる。

「五日は衰弱を覚えしが午後ふと精神激昂夜に入りて俄に烈しく乱叫乱罵するほどに頭いよいよ苦しく狂せんとんして狂する能はず独りもがきて益苦しむ(明治三四年十月五日)」⁽¹⁴⁾

翌1902(明治35)年3月10日の記述は、こうだ。

「この日始めて腹部の穴を見て驚く 穴といふは小き穴と思ひしにがらんどなり 心持悪くなりて泣く」⁽¹⁵⁾

巾帯を変えてもらう際、初めて患部を見る。読み手にその具体的な大きさまでは分からぬが、子規自身の予想を遙かに超えた大きな穴がある。子規はそれを「がらんど」と表現した。中に何も無い、ぽっかりと開いた、深淵のような、虚無のような穴である。痛みよりも恐怖よりも、心持が悪くなり、そして泣く。「次第に破壊が進行し」という医学辞典の記述からはうかがい知ることのできぬ、凄絶な病苦の著し様である。

咯血当時、子規の本名は、升(のぼる)であった(後、常規)。1週間ほど続いた咯血の際、ほととぎす(漢字で「時鳥」「不如帰」「子規」などと書く)の句を40～50作ったことから、以降、子規と号した。口の中が赤く、甲高い声で泣き続けるこのカッコウ目・カッコウ科の鳥は「鳴いて血を吐く」との故事があり、子規の号は咯血した自身になぞらえたものと考えられている。自身が指導的役割を担った俳句雑誌『ほととぎす』(1897年創刊、後に『ホトトギス』など表記が変わる)も、ここから来ている。『ホトトギス』誌上で、子規は、誌面刷新の一環として、読者から「一週間日記」と「一日記事」の投稿を呼びかけ、これらを交互に掲載した。日記というものに、子規は思い入れを強く持っていたようだ。

子規は亡くなるまでの7年を、現在の東京都台東区根岸にある長屋⁽¹⁶⁾

で過ごし、後に四大随筆と呼ばれる日録『松蘿玉液(しょうらぎょくえき)』、『墨汁一滴』、『仰臥漫録』、『病牀六尺』を、病床で、旺盛に書き続けた。

1. 子規の病床日記に綴られる「食欲」、あるいは生きるよすがによる慰謝

先述したように、『仰臥漫録』は私的な手記、『病牀六尺』は新聞『日本』に連載することを目的に書かれた。『仰臥』は、1901(明治34)年9月2日に始まり、同年10月30日から翌年3月9日までの中断を経て再開。1902(明治35)年3月10日から12日まで続けられた後、間を置いて6月20日から29日までは、『麻痺剤服用日記』の題で遺された。『病牀』は、1902(明治35)年5月5日から同年9月17日、子規が世を離れる2日前まで連載された。他に、死後病室で発見された3編の未定稿がある。

『仰臥』と『病牀』では、1902(明治35)年6月20日から29日まで(『仰臥』の『麻痺剤服用日記』)の部分が重なり合う。非公表/公表の相違があるにせよ、『仰臥』から『病牀』へと日記は題を変えて書き続けられたことになる。確かに『病牀』では、やまいによる苦悶に加えて、新聞連載らしく、時事問題や芸術論、来客を通してうかがい知る国際情勢の洞察、子規庵周囲の変化、折々の俳句、といった具合に、多岐にわたる話題が綴られている。

一方の『仰臥』は、食事の献立、家族や来客、弟子たちとのやりとり、目に入る庭や草花の様子、家庭経済の状態、そして「午後逆上益はげし北側の四畳半の間に移る 額を冷し頭を仰ぎただ鼻血の出んことを恐る 目痛く続いて新聞を見る能はず」⁽¹⁷⁾といった痛みや苦しみ、自分自身と身の回りのありのままが記述されている。

とくに食に対する食欲さは注目に値する。

子規は『仰臥』の以前、やはり新聞『日本』紙上に、1901(明治34)年1月6日から同年7月2日まで、同様の病床日記『墨汁一滴』を連載している。そこで自身の病状について、「小生の病気は単に病気が不治の病なるのみならず病気の時期がすでに末期に属しもはやいかなる名法もいか

なる妙薬も施すの余地無之神様の御力もあるいは難及かと存居候〈……〉この頃では頭を少し擡ぐことも困難に相成、また疼痛のため寝返り自由ならず蒲団の上に釘付けにせられたる有様に有之候。疼痛烈しき時は右に向きても左に向きても痛く仰向になりても痛く、まるで阿鼻叫喚の地獄もかくやと思わるるばかりのことに候」と伝えつつ、「ただ小生唯一の療養法は、『うまい物を喰う』に有之候」⁽¹⁸⁾と述べるのである。

公表を意図しない『仰臥』において、食に関する貪欲さは、隠されることなく露呈されている。食の記録といって過言でないほどだ。

日記の書き始めである9月2日の記述にこうある。

朝 粥四椀 はぜの佃煮 梅干し 砂糖つけ
 昼 粥四椀 鰹のさしみ一人前 南瓜一皿 佃煮
 夕 奈良茶飯四椀 なまり節 煮て少し生にても 茄子一皿
 この頃食ひ過ぎて食後いつも吐きかへす
 二時過牛乳一合ココア交て
 煎餅菓子パンなど十個ばかり
 昼飯後梨二つ
 夕飯後梨一つ
 〈……〉
 今日夕方大食のためにや例の左下腹痛くてたまらず
 暫にして屁出で筋ゆるむ⁽¹⁹⁾

続けて一句、「餓鬼も食へ闇の夜中の鮎汁」……。

旺盛と言うには過剰すぎる、決して満たされることのない、餓鬼のような食欲だ。自身「唯一の療養法」と書くように、「食べること」は、寝返りを打てぬ疼痛にさいなまれ、苦悶、煩悶する子規にとって、生きるよすが（ケア）なのである。

そのよすが（ケア）さえもが、失われようとしている。『病牀』1902（明治35）年6月19日に「如何にして日を暮すべきか。如何にして日を暮すべきか」（傍点ママ、以下同）、6月20日には「若死ぬることが出来ればそれは何より望むところである。併し死ぬることも出来ねば殺して呉れるものもない。〈……〉誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか。誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか」とある。

この訴えは、芥川の『齒車』で考察したスピリチュアルペインの顕れ、「誰か僕の眠ってゐるうちにそつと絞め殺してくれるものはないか」⁽²⁰⁾と、きわめて類似してはいないだろうか。⁽²¹⁾

6月21日。「去年頃迄は唯一の楽しみとして居つた飲食の慾も、今は殆ど消え去つたのみならず、飲食其物が却て身體を煩はして、それが爲に晝夜もがき苦しむことは、近来珍しからぬ事實となつて来た」⁽²²⁾……生きるよすがだった食までもが苦しみとなった今、子規は「如何にして日を暮らすべき」「誰か此苦を救ふて呉れる者はあるまいか」と訴え、「情ある人我病牀に来つて余に珍しき話など聞かさんとならば、謹んで余は爲に多少の苦を救はるることを謝するであらう」⁽²³⁾と懇願するのである。

作家の夏目漱石、森鷗外、歌人の長塚節、伊藤左千夫、俳人の河東碧梧桐、高浜虚子ら、数多くの知人や弟子に囲まれていた子規が、この期に及んでよすがとするのは、「あなた」なのである。スピリチュアルペインの顕れには、人生の意味の喪失、未来への希望の喪失、そして人や愛着するものとの関係性の喪失が関わっているとされる。スピリチュアルペインに苛まれる子規がここに至って人との関係性に強く執着するのは道理、と言えるだろう。

しかし、そればかりではない。

子規にはもう一つ大切なものが残されていた。そして、それは死ぬ間際まで、子規の痛みをやわらぎであり続けるのである。

2. 「生きて在る毎日」の記録への固執、あるいはスピリチュアルケア

死の一年ほど前から、子規は強い希死念慮にとらわれている。

『仰臥』1901（明治34）年10月13日に、「大雨恐ろしく降る 午後晴／今日も飯はうまくない」と記した後、「余は俄に精神が変になつてきた」と書く。看病の担い手である妹は銭湯に出かけていて、今は母が傍らにある。いよいよ変調を来した子規が「たまらんたまらんどうしようどうしよう」と連呼すると母は「『しかたがない』と静かな言葉」、子規が門下生の俳人、坂本四方太宛に「直ぐに『キテクレネギシ（根岸の家に来てくれの意、筆者注）』」との電報を打つよう頼むと、母は出ていく。子規は一人になる。手の届く硯箱には、小刀と錐が置かれている。先ほどから子規の視界に入っていたものである。「時々起こらうとする自殺熱はむらむらと起つて来た。〈……〉已むなくんばこの小刀でも喉笛を切断出来ぬことはあるまい。〈……〉死は恐ろしくはないのであるが、苦（くるしみ）が恐ろしいのだ 病苦でさえ堪へきれぬにこの上死にそこなふてはと思ふのが恐ろしい 〈……〉考へて居る内にしやくりあげて泣き出した その内母は帰つて来られた」⁽²⁴⁾

その日の日記には、小刀と錐の画が添えられている。

自らの死を願うほどにこの頃の子規は疲弊している。しかし、疲弊の極みにありながら、そのおよそ半年後、公の日記である『病牀』の連載を始めるのである。書くこと、書き続けることへの、とてつもない執念が、見え隠れする。加えてそこに、子規は「読み手」という「あなた」を確かに欲したのである。

『病牀』は、繰り返すが、子規の死の2日前まで、書き続けられる。間断なく襲いかかる疼痛と、ひたひたと近づいてくる死の不安の中で、「病勢が段々進むに従つて何とも言はれぬ苦痛を感じる。それは一度死んだ人か若しくは死際にある人でなければわからぬ」⁽²⁵⁾と記し、いくども「逆上」し、「煩悶」しながら、その一方「立齋廣重は浮世絵畫家中の大家である」と評し、「淺草の観音の門にある大提灯を非常に大きくかいて、本堂は向

ふの方に小さくかいてある。〈……〉といふような著しい遠近大小の現はしかたは、日本畫には殆どなかつたことである」と分析する。觀賞し、賞翫し、考察し、記述する。生きるよすがであつた「食」が苦しみとなつてもなお、子規にあつて、「書く」「伝える」欲望の衰えはない。

悟りといふ事は、如何なる場合にも平氣で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平氣で生きて居ることであつた。⁽²⁶⁾

上は、6月2日の記述である。六尺の病床にあつて、寝返りもままならず、疼痛にのたうち、排便の処理も自らなし得ず、逆上して母や妹を罵り、時々刻々体を朽ちさせ、穴だらけにさせる酷薄なやまいの中にあつて、それでも子規は生きて、そして、書く。

書くという行為、伝えたい思いは、痛みをも客観化する。死の一週間前、9月12日に、子規は短くこう書く。「自分はきのふ以来晝夜の別なく、五體すきなしという拷問を受けた。誠に話にならぬ苦しさである」⁽²⁷⁾。その翌日、9月13日には、「人間の苦痛は餘程極度へまで想像せられるが、しかしそんなに極度に迄想像した様な苦痛が自分の此身の上に来るとは一寸想像せられぬ事である」と書く。

9月15日には、すでに死を間近にして自らの放つにおいに思い致してか、芭蕉の「蚤蝨（のみしらみ）馬のしと（尿）する枕許」という句を引いて、「しかし芭蕉はそれ程臭氣に辟易はしなかつたろうと覚える」⁽²⁸⁾と書いた。

16日の日記はなく、17日には知人の狂歌作者、芳菲山人から手紙があつたことに触れ、「俳病の夢みるならんほととぎす拷問などに誰がかけたか」の句で締められている。『病牀六尺』の最後である。

さらに翌18日午前10時頃、有名な絶筆三句が詠まれた。

をととひのへちまの水も取らざりき
糸瓜咲て痰のつまりし佛かな
痰一斗糸瓜の水も間にあはず

妹の律（りつ）に紙を貼り付けた画板を持たせ、仰臥のままこれらの句をしたためた。弟子の河東碧梧桐は、こう述懐する。「筆に墨を含ませて、子規の右手に渡すしぐさを幾度も繰り返して、〈……〉三句の絶筆が出来た」、と。⁽²⁹⁾

子規は翌19日午前1時頃、静かに息を引き取った。その夜、泊まりで看病に来ていた高浜虚子が記す。「(子規の母親が)あまり静かなので、ふと気がついて覗いてみると、もう呼吸はなかったというのであった」と。

仰臥のまま、苦しみにあえぎながら、かつスピリチュアルペインに苛まれつつ、子規は書いた。死を駆逐するほどの生の痛みの中にあって、書くことが、子規にとっての唯一の療養法、スピリチュアルケアであったと考えられないだろうか。

Ⅲ．遠藤周作の日記にみる苦闘とやわらぎ あるいは創作の痛みと歓喜と

日本近代文学の勃興期である明治から時は下る。若い頃から肺結核などさまざまなやまいに苦しめられた文学者、カトリック作家に、遠藤周作（1923-1996年）がある。

東京に生まれた遠藤は、3歳の時、父の転勤で満州（現・中国東北部）の大連に移り、10歳で父母の離婚により、母に連れられ兄とともに帰国、母のすすめで夙川カトリック教会に通うようになる。私立灘中学校在学中に夙川教会で受洗。洗礼名はポール。1948年、25歳で慶應義塾大学文学部仏文科を卒業し、雑誌『カトリック・ダイジェスト』の編集を手伝いながら作家活動を始め、1950年には戦後初の留学生として現代フランスカトリック文学を研究するため、フランスへ向かう。2年半の滞仏期間中に、咯血。帰国後1年間は体調が回復せず、殆ど寝たきりの生活を送る。この

頃、母郁が脳溢血で倒れ、急死している。1955年『白い人』により第33回芥川賞を受賞。同賞を受賞していた安岡章太郎、吉行淳之介、庄野潤三らとともに「第3の新人」と呼称される。大学の後輩である岡田順子と結婚。その後、順子夫人を伴い、二度目の渡仏。スペイン、イタリア、ギリシア、エルサレム、エジプトを巡って帰国後、1960年、肺結核の再発で入院。翌年3度の手術を受ける。3度目の手術は6時間にも及び、一時心停止を来すほどの重大事に至っている。入院期間は2年2ヵ月に及んだ。1966年3月、代表作の一つ『沈黙』を上梓。1980年、上顎がんの疑いで慶應義塾大学病院に入院。がんではなかったものの、退院後も体力が回復せず、糖尿病の悪化にも苦しめられた。翌81年には、高血圧、糖尿病に加え、肝臓病が悪化して入院、その後も自宅療養を続ける。1990年、書き下ろし長編の創作日記（没後、『「深い河」創作日記』として刊行）を書き始める。1992年9月8日『深い河（ディープ・リバー）』の初稿を脱稿。1993年順天堂大学病院に入院し、腹膜透析の手術をする。6月、最後の書き下ろし長編『深い河（ディープ・リバー）』を刊行。その出版時、危篤状態だったが、生還。1996年、肺炎による呼吸不全などにより、入院先の慶應義塾大学病院にて召天。73歳だった。棺には、本人の希望で、『沈黙』および『深い河』の2冊が収められた⁽³⁰⁾。遠藤にとって、この二冊が他にも増して特別な作品であろうことが推察される。

『「深い河」創作日記』は、1990年8月26日日曜日に書き始められ、1992年11月19日まで約2年3ヵ月にわたって続けられた。その後、1993年5月21日から25日までの短期間、『病状日記（腎臓手術）』が綴られている。これらの日記は、遠藤がやまいに苦しみ、将来を不安視し、満身創痍で、しかし代表作となる最後の長編小説と取り組んだ時期と重なる。

遠藤周作『「深い河」日記』の呻吟 あるいは憂鬱との葛藤

『「深い河」創作日記』は、「新しい小説の漠然たるイメージはあるのだが、

まだ着手していない」という記述に始まる。「気持ちだけ焦燥しているが踏み出せない」「とに角一枚でもよい。書き出せば始まるのだ。それは分かっているのに」と、のっけから創作の苦しみが直截表現されている。翌日も「肝心の創作には手がつけられなかった」⁽³¹⁾と書く。その後、おぼろげながら登場人物の輪郭が描き出されていくが、年が明けても、1991年1月2日「仕事場に行き、茫然として一日を過ごす」、7日「本格小説、依然として着手できず。わが身を恥じるのみ」という具合だ。その後も、友人らとの交流、会食、観劇、碁や読書の毎日が綴られ、9月27日になってもなお、「小説構想一向に進まず。〈……〉書齋にて頬杖をつき、徒に一日を過ごす」とある。「創作日記」というより、備忘的な日録の域を出ようとはしない。あっという間に1991年の大晦日だ。「余、病弱の身にて漸く68歳の年齢を終えんとす。昔日、五十歳まで生きればと思っていた事、夢の如し。今日まで生かしてくれた神に感謝せざるべからず」、この年の日記をそう締めくくった。

明るる1992年元旦、「今年こそ長篇完成させねばならぬ」という決意で日記は始められる。その後、断片的なエピソードや、登場人物の造形、人間関係などが記され、「ようやく（不本意ながら）小説少しだけ進む」（1月11日）、「小説ほんの少し書く」（12日）といった書き付けが散見されるようになる。かと思うと、「目眩のせい、どうも小説に身が入らない」（18日）、「一体この小説を書き続ける必然的な理由があるのだろうか」（19日）と、逡巡もなお見られ、「目眩が続いてもう一ヵ月になる」（25日）と、体調の不安も訴えるのである。文学者が真摯に創作に対峙し、呻吟しながら、ことばを紡いでいく、行きつ戻りつ煩悶する過程が露わである。

「今日書いたのは人肉をビルマ戦線で食べた男、津田の入院の場面」（2月9日）

「小説、遅々として進まず」（2月13日）

「小説、無理矢理推し進めている感じ」（2月18日）

そして、3月1日、「私の小説のほうは、やっと雪解けが始まった感じがする。凍結した氷河が少しずつ割れ、流れ始めた。傲慢かもしれぬが、

うまくいけば、かなり私の作品のなかでも優れたものになるような気さえしてきた」と、ようやく光を見いだしたかと思ったら、3月6日には「心身ともに自信を失う。小説についても同様なり。遅々として不進。挫折感しきりなり」となる。その後、「少しずつ、少しずつ、人物が動く」（4月19日）、「少しずつ、少しずつ小説が具体化する」と、記すが、「朝、トイレで血痰を見る」（4月21日）といったように、体調不安も続いている。

5月に入って、「思いがけぬ小説の展開」（5月2日）と記し、構想が具体化したことが示される。

六月二十二日（月）快晴

〈……〉

最初の書き出しがやっと決まる。

「私必ず生まれ変わるわ。場所は何処かわからないけど……あなたの生きて居る間、この世界の何処かに、必ず生まれてくるから」

〈……〉

この書き出しで読者を一挙につかむ事ができる。この書き出しで、この小説に叙情的な甘美さを与えることができる。

実際には、上記の文章は『深い河』本篇の冒頭一文ではないが、確かに第1章に同様の記述は見られる。読者の心をつかむための渾身の書き出し……創作日記を記し始めて、約2年をかけ、遠藤はようやくここにたどり着いたのである。

以降、「とに角、今度の小説を書いているときが今の私の毎日で一番充実しているのだ。一日の小説予定分を終了すると、私の残骸がテレビをみたり、本を読んだり、酒を飲んだりしている。〈……〉この日記を読みかえしてみると、はじめのプランがまるで流れるに従って方向を様々に変え、紆余曲折しているのがよくわかる。小説の出来るまではこういうものだ。結局、無意識が書かせているのだ」（7月16日）といったように、作品の

構成や流れを振り返る余裕が生まれている。それからは、書き直しやエピソードの追加などに触れる記述が多くなる。作品が形になりつつあることが分かる。そして9月8日、「初稿、やっと書きあげる」とある。

その後も、日記は続く。ところが初稿脱稿後は、小説の書き直しについて短く触れる他、作品そのもの、創作の労苦に関する記述はあまり見られない。遠藤は、この頃、腎不全と診断され、10月には順天堂大学に検査入院することになっていたのである。肺結核に始まって多くのやまいを得、今また70歳にして余命を思うとき、自身の行く末に対する不安と苦しみ、解しがたい痛みが湧き上がってくる。

「万病一身に集り、余命の少なさを感じる」（9月24日）、「小説の手直し。私は少しずつ自信を失ってきたような気さえする。〈……〉みじめな一日」（10月16日）、「自分の悲惨な老年をあれこれ想像して仕方がない」（10月17日）、「谷先生のところへ行き血圧を計る。百七十～九十。自分の死がいよいよ近づいている事を思う」（10月21日）、「毎日みじめでならない。一身多病を背負い、人生のなかで壁にぶつかり、七十歳という老齢では情けない事おびただしい。〈……〉自分でも醜いと思う」というような自らに対する否定的な言辞が続けられる。約3年を費やしてようやく最終稿にたどり着こうとしているこの作品は、作家にとっての命といって過言でないだろう。その手直しの作業についても、「自信を失ってきた」と嘆き、「毎日みじめでならない」、「自分でも醜い」と、書き付ける。意味や希望の喪失を示したこれら真率な言表は、スピリチュアルペインの顕れと考えることができるだろう。

10月24日、検査入院。11月に入って退院後、「(糖尿病性網膜症のため※筆者注)「自分の晩年が盲目になるやもしれぬとは考えもしなかった」と悲嘆に暮れる。それでも11月9日には、こうある。

仕事場にて、少し仕事。憂鬱な気持ちを『深い河』の草稿を訂正することで忘れたいのである。「河」という題が「深い河」という題

に変わったのは黒人霊歌の「深い河」を昨日聞いて、それこそこの小説の題をあらわしていると思った。作品中にこの霊歌を暗示する一節を入れたい。

筆者) 補足、以下、Deep river 歌詞 (私訳)

Deep river, my home is over Jordan,

Deep river, Lord,

I want to cross over into campground.

深い河 わがふるさはヨルダン川のかなた

深い河を 主よ われこいねがう

わたりて 集いの場に赴かんことを

『深い河』の主人公の一人、神の無力を指摘して止まない女性、美津子は、死者の遺灰や犬の死骸が漂い流れるガンジスに体を浸して「信じられるのは、それぞれの人が、それぞれの辛さを背負って、深い河で祈っているこの光景です。〈……〉その人たちを包んで、河が流れていることです。人間の河。人間の深い河の悲しみ。そのなかにわたくしもまじっています」⁽³²⁾と、祈りにも似たことばを紡いでいる。遠藤は、日記に書いた通り、この霊歌 Deep river を暗示する一節を入れたのである。

『「深い河」創作日記』に続く『病状日記(腎臓手術)』の最後の日付(1993年5月25日)に、遠藤は「今まで五回にわたって手術を受けたが、今日の手術ほど痛く、辛く、堪えられぬものはなかった。途中でこのまま殺してほしいと何度も思った」と書いた上で、こう記している。

痛みをまぎらわすため、『深い河』の一節を思い出し、あそこはこう書くべきだったなどと考えるのも小説家の性であり、今のぞむのはあの小説の出来上がりだ。早く表紙をなでてみたい。この小説の

ために文字通り骨身をけずり、今日の痛みをしのがなければならなかったのか。⁽³³⁾

先述のように、遠藤は『深い河』の「出版時、心不全で危篤であったが、それを乗り越えて病床で手にする」⁽³⁴⁾。

書くという行為は文学者にとって、命の糧である。またたといスピリチュアルペインにさいなまれていても、書くという行為、況んや、書いて、残す、さらには伝えるという行為は、文学者にとって、よすが（ケア）につながるのである。子規がそうであり、遠藤がそうであったように。

ところでこのよすかは、ただ文学者に限った特権であろうか……。

おわりに

医師が、自らやまいを得て、その後を綴る手記は少なくない。

たとえば、脳外科医師でありながら、悪性脳腫瘍に罹患した岩田隆信氏と、その妻規子氏による著作がある⁽³⁵⁾。

岩田隆信氏は、1997年1月29日、出張先の福島県で激しい頭痛に襲われる。その後、MRI検査を受け、画像を一目見た脳外科医 隆信氏は、自身の優れた知見により、残酷にもそれが悪性の脳腫瘍であることを知る。確定診断後、最初の手術で、悪性の脳腫瘍のうちでも最も悪性度が高い神経膠芽腫であることが判明、岩田氏は「この日を境に、私の精神状態はますますうつがひどくなり、ややもすると、マイナス思考から抜けられなくなる状態に陥っていったのでした」⁽³⁶⁾と記す。その後職場復帰に向けて準備をしていたところ、がんの再発を確認。6月26日の日記には、「神は残酷である」⁽³⁷⁾と書いた。超越者への呪詛、スピリチュアルペインの顕れの特徴である。再手術。再びがん細胞を発見。「神は私を見捨てた。みなさんさようなら。規子、よくやってくれた。綾乃（娘）、いい子に育てよ」⁽³⁸⁾と、こう残した5日後、3度目の手術の直前で、隆信氏による記述は終わり、以降、規子氏によって手記は書き続けられる。

3度の手術で、隆信氏には半身麻痺が残り、さらに半年後、再々再発が生じる。治癒の選択肢はなくなり、ターミナルケアが始まる。最期のひとときを自宅で過ごす隆信氏を見つめる、妻の規子氏と娘の綾乃さんのまなざしはやさしい。

綾乃はこのごろ、赤ちゃんのようになったお父さんの面倒をよくみてくれます。朝など、ウーとかアーとか言っているお父さんに、私にそっくりな口調で、「どうしました?」と言って、お茶を飲ませてくれます。夜もトンチンカンな話しをニコニコしながら聞いていたり、ベッドと一緒に横になって、撫でたりしています。／こんなことはいままでなかったこと。生まれて初めてのことです。⁽³⁹⁾

ここに明らかなスピリチュアルペインのやわらぎを看取できないだろうか。書くこと、残すこと、さらには誰かに思いを伝えることが、岩田隆信氏本人にとっても、その家族にとっても、知らずスピリチュアルケアの一方途となっているのではないだろうか。文学者であれ、医師であれ、誰であれ、そのような可能性の扉は開かれている。

近年、SNS (Social networking service) において、やまいを得た人同士が交流するピアサポートサイトや、ブログ、ツイッターなどが多く見られる。その内容はさまざまで、効果についても、今後精査、分析、検討を待たなければならないが、書く、残す、伝えるということの選択肢が広がりを見せていることは確かだろう。そして、書き、残したものを、読み、感じてくれる誰か、すなわち「あなた」が存在していることも、また疑い得ないことなのである。

注

- (1) Dame Cicely Saunders(1984), *The philosophy of terminal care*, Saunders Ed., *The management of Terminal Malignant Disease*(2nd ed.), Edward Arnold.
- (2) 日本緩和医療学会ガイドライン統括委員会 (2018年)『がん患者の治療抵抗性の苦痛と鎮静に関する基本的な考えの手引き 2018年版』金原出版、56頁に「スピリチュアルな痛みは複数の定義が提案されており、日本の臨床現場で統一して使用されているものは確立していない」とある。
- (3) 内藤明美、森田達也他 (2021)「スピリチュアルペインに関する緩和ケア医と精神科医の認識に関する全国調査」『Palliative Care Research』16巻2号、日本緩和医療学会、115-122頁。
- (4) 日本疼痛学会ホームページ『改訂版「痛みの定義：IASP」の意義とその日本語訳について』、http://plaza.umin.ac.jp/~jaspain/pdf/notice_20200818.pdf、2022年2月19日最終閲覧。
- (5) 加藤周一 (1971)『文学とは何か』角川書店、20頁。以下の6行は、小林和夫 (2018年)「文学作品に見るスピリチュアルペインの顕れ——死によってのみ和らぎ得るスピリチュアルペイン：芥川龍之介の『歯車』を手がかりに——」『キリスト教教育研究』第35号、立教大学キリスト教教育研究所、86頁を追記訂正したものである。
- (6) 同書、36頁。
- (7) ドナルド・キーン (Donald Keene) 米国出身の日本文学者。後に日本国籍を取得。
- (8) ドナルド・キーン (2011年)『百代の過客』(金関寿夫訳) 講談社、11頁。
- (9) 同書18頁。
- (10) 長谷川權編 (2001年)「病牀六尺」『子規選集第一巻』増進会出版社、300頁。
- (11) 同書「仰臥漫録」、148頁。
- (12) 小林和夫前掲書において、「ここでの文学作品とは、作家と呼称されるに遜色ない人によって著された小説、戯曲、詩歌等々を指す」としており、すなわ

ち文学者は「作家と呼称されるに遜色ない人」の意とする。

- (13) 正岡子規 (1927 年) 『病牀六尺』 岩波書店 (岩波文庫)、5 頁。
- (14) 正岡子規 (1927 年) 『仰臥漫録』 岩波書店 (岩波文庫)、97 頁。
- (15) 同書、130 頁。
- (16) 現在、「子規庵」として公開。建物は、1945 年 4 月 14 日の空襲で焼失、その後 1959 年に再建されたもの。東京都文化史跡。 <https://www.shikian.or.jp/#latest-news> (2022 年 2 月 19 日最終閲覧)
- (17) 前掲 『仰臥漫録』、97 頁。
- (18) 正岡子規 (2001 年) 「墨汁一滴」 『子規選集第一巻』 増進会出版社、83-84 頁。
- (19) 前掲 『仰臥漫録』、11-12 頁。
- (20) 芥川龍之介 (1929 年) 「歯車」 『西方の人』 岩波書店、168 頁。
- (21) 小林和夫前掲書において、上記芥川の文を引用し、「これは本作におけるまぎれもないスピリチュアルペインの顕現と考えられないだろうか。しかもこの痛みは、もはや死をもってしかやわらぎ得ない」と考察している。
- (22) 前掲 『病牀六尺』、70 頁。
- (23) 同書 71 頁。
- (24) 前掲 『仰臥漫録』、104-106 頁。
- (25) 前掲 『病牀六尺』、34 頁。
- (26) 同書、41-42 頁。
- (27) 同書、189 頁。
- (28) 同書、190 頁。
- (29) 河東碧梧桐 (2002 年) 「子規の回想 (抄)」 『子規選集第十二巻』、206 頁。
- (30) 山根道公編 (2018 年) 「遠藤周作・年譜」 『遠藤周作全日記 [下巻]』、405-426 頁、河出書房新社より編集。
- (31) 同書、遠藤周作 『『深い河』 創作日記』、323-369 頁 (本論 16 頁までの引用箇所はすべて同日記より)
- (32) 遠藤周作 (1993 年) 『深い河 (ディープ・リバー)』 講談社、338 頁。
- (33) 前掲 『遠藤周作全日記』 「病状日記 (腎臓手術)」、370-371 頁。

- (34) 前掲『遠藤周作全日記』「遠藤周作・年譜」、420 頁。
- (35) 岩田隆信（1998 年）『医者が末期がん患者になってわかったこと』中経出版。
岩田隆信、岩田規子（1999 年）『続・医者が末期がん患者になってわかったこと』中経出版。
- (36) 岩田隆信前掲書、147 頁。
- (37) 同書、181 頁。
- (38) 同書、226 頁。
- (39) 岩田隆信、岩田規子前掲書、256 頁。

(JICE 研究員)